慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	西部ソロモン諸島における民族学的調査の覚え書(中)
Sub Title	An ethnological note on the British Solomons (II)
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.103(537)- 122(556)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	調査報告
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西部ソロモン諸島における民族学的調査の覚え書（中）

伊藤清司

（七）部落間抗争と廃村と

Vella Lavella 島西海岸部落に住む Veala 族系住民のあいだに、今なお、印象深く語りつがれている一つの事件がある。未開社会のこの種の口碑のつねとして、その年代の推定は困難であるが、彼らの伝承では、おゝよそ一〇〇年ほど前の事件という。あい対峙する Veala 山と Kumboro 山に、当時群居していた両族のあいだに、長期間にわたつた紛争が起こり、このため Veala 山上の集落が破壊され、多くの婦女老幼までが殺害されたという。この不幸な事件の発端は、性秩序の侵犯にあつた。たまたま、Veala 族の Undu という名の独身の若者と、Kumboro に属する人妻との関係が問題化し、〝絶えて敵対関係の皆無であつた〟といわれる両族が抗争をくりかえし、やがて近隣諸族の、ついには、他島からの求援を得て、攻防を展開したのだという。今回、われわれ調査隊が発掘した Veala 山上の Piluza 以下の集落址が、このときの戦争で放棄、ないし崩壊したものであるという確証はない。しかし、仮にこの Undu 事件を、島民たちが伝えるように約一〇〇年前のこととすれば、――これを語る彼らの生々しい記憶は決して遠い過去の祖先の物語とは思えないが――上述のように、推定される同遺跡の下限年代と勘案してみると、両者のあいだは年代的に必ずしも無縁とはいえないものがある。

しかし、一九一〇年?に発生した Binskin 事件（後述）の際、植民警察の力で、Paramata 後背山中のいくつかの集落が破壊、あるいは住民がそこから強制待避を余儀なくされており、その中に、Veala の名も含まれている。Piluza などの Veala 山頂集落の放棄を、この Binskin 事件当時とすることの可能性も否定できない。いずれにしろ、さきの Undu 事件当時、調査発掘地点に、Veala 族の集落が存していたという Lezutun iSilas など Veala 族系住民の伝える伝承は、信憑性をもつものとみてよいであろう。

原住民抗争による部落壊滅のこのような伝承を、他の土地でもいくつか聴取した。たとえば、Vella Lavella 西海岸の海上に横たわる Baga 島は、近年まで無人島であつたといわれるが、もともと無住の地ではなかつた。これが無人の島と化した経緯について、つぎのような伝承がある。

伝承第4

LETEと二人の息子たち

かつて対岸のVella Lavella島のTetelanaに、Leteという名の寡婦が二人の息子と住んでいた。ある日、息子らが沖でかつお釣りの最中、Baga島の土人に襲われ、拉致された。これを知った同族の男たちは、貝貨の代償により応援を求められて協力する近隣部落の戦士たちと、Baga島を襲撃。島民をみな殺しにし、山中の洞穴にかくまわれていた二人の男の児を救い出したという。二人の少年は、あらかじめ*いけにえとして屠るべく、捕えられたのであった。（以上梗概のみ）（Paramata在住、Neoh老人談）

【*酋長の葬儀・canoe houseの新築・war canoeの新造などのたびに、人身供犠が行われた。】

現在、Bagaの山中に、人跡とskull houseの遺趾らしきものを見出すといわれる。（在BagaのSolomon林業株式会社々員らの談。）たゞし、それらが果して、上記伝承中の住民とどのような関係をもつものであるのか、遺趾そのものを確認をしていないので言明の限りではない。

なお、原住民間の斗争は、相当量の貝貨などの支払い、あるいは交換によって終熄することがたびたびあり、まれに抗争が惰性化して、自然に和解する場合もあったというが、かつて島・部落間の対立抗争はかなり頻繁で、この海域の原住民社会上に占める戦争の位置は大きく、その文化形成上におよぼした影響は重視に価する。

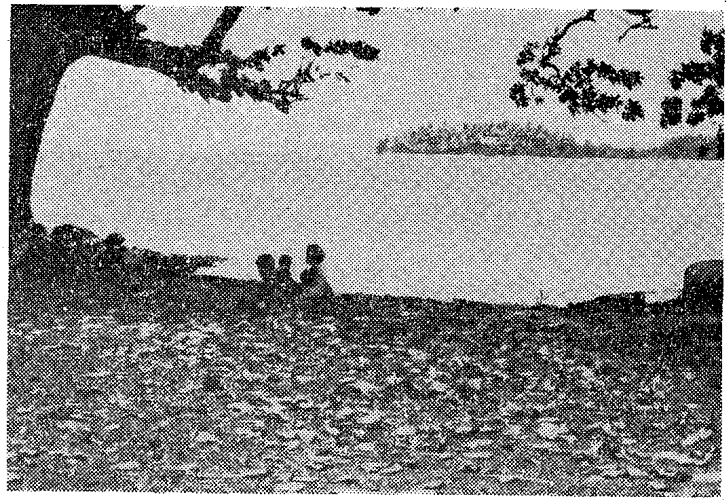
（八）LEZUTUNI家の移居略史

さて、Paramata部落のLezutuni Silasの語るところによれば、彼の母Bongarigeは鰐Esoroをtotemとする Veala族に属し、当時、Veala山腹の叢林中にあったTuokasi部落に生まれている。彼女が上述のUndu事件とこれに続くKumboro族との斗争を経験したか否かは詳らかでない。Bongarigeの出自については、別にVeala山とその南につらなるKumboanaの丘の中間台地上にあったKunguであるともいわれる。Kunguは彼女の母Oveburuの出自で、Bongarigeはおそらく両親がTuokasiに移居中、その地で出生したものと推定される。

他方、Silasの父PorekeはMaisao川の上流域で、Kumboro山の南麓に当るBuleatuに生まれた。Kumboro族出身で鳩Turu-turuをtotemにする。一九〇〇年前後と推定されるある時期に、Kumboro族が大挙してChoiseul島へ遠征したが、Porekeも、彼の父Sogaとともにこれに参加した。父Sogaはこの遠征中、鉄砲に撃たれChoiseul島で死亡している。Sogaの妻のJutekuは、そのごTu'umbuo出身のTepoeと再婚。Ruruke（死亡）、Brosore（死亡）およびNeohを生んでいる。（第六図参照）この間、PorekeはBongarigeと結婚して、Vealaの山腹に新居を構えた。Silasの長兄Pikobuleは、こゝで誕生。未成人のまゝこの付近で病死？している。

Lezutuni Silas（Silasは彼のChristian name）は両親が

Kungu 住在時代に出生。母はこのとき、部落付近の bush の中にもうけられた産小屋（Sikupane）に籠つた。出産後一〇日以上を経て、Sikupane から家にもどるのが当時の土俗であつた。産小屋はかつて、西部 Solomon では普遍的であり、月経小屋も同様に存在したと思われる。New-Georgia 島の Munda では、礁湖のなかの特定の小島（第十二図参照）が、女性の特殊期間の籠りの場と定められ、本島内での女の血の穢れは、死をもつて罰せられる厳しい禁忌をともなつたという。



第十二図　Roviana 湖礁の中の小島

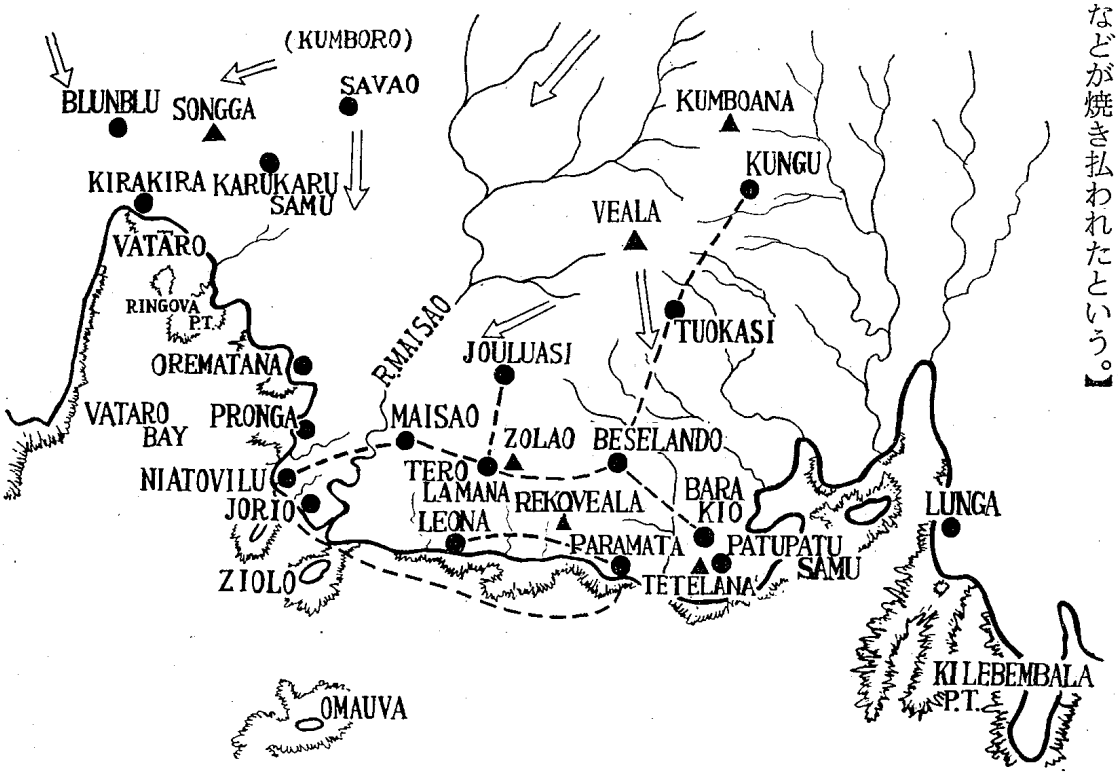
Kungu で生まれた Lezutuni はこれより青年期に達するまで、家族とともに前後七～八回、Veala 山の西麓を中心に居をかえている。彼の記憶に残るものとしては、まず Kungu から Tuokasi へ。以下、（→Barakio）→Toukasi→Beselando（→Barakio）→Tero-lamana→Jouluasi→Maisao→Niatovilu→（第十二図参照）

この間の遷徙は、大体、焼畑耕作の適地入手のためという経済上の事由によるという。Lezutuni Silas の Maisao 居住時代は、推定20才前後とされるから、おゝよそ二～三カ年ごとに居を移した計算になるが、実はこの中には一時的な転居が含まれる。nut の採集のため、家族からはなれ、Barakio の出作小屋状の仮屋で、やゝ長期にわたつて父とともに滞留した場合もそれである。Jouluasi の場合も、おそらく出作小屋での臨時的な居住ではなかつたかと推定される。

また、Binskin 事件としてしられる原住民による白人殺害事件のため、Veala 系諸族は、植民地政府の強制で、Baga 島へ一時待避を余儀なくされたこともある。*このときを例外として、移居は、Silas の記憶によれば、比較的小集団の血族中心で行われた模様で、Maisao への転居の場合は、叔父の家族がまずこゝに出作小屋を建て、芋作の適地であることを確認したのち、Lezutuni の家族も住居を移したという。

*一九一〇年？Baga の属島 Inia 島に基地をおく白人 trader の Binskin が、Bougainville へ渡つた留守中、Biloa の Sito ら数人の原住民が、Inia 島を襲つて、鉄などの商品を盗み、Binskin の妻子および召使の Malaita 人ら計六人を殺害した事件。加害者が Vella Lavella の Tetelana の丘に逃亡したため、警察当局の指示により、付近の Beselando, Jouluasi, Tuokasi, Veala の人々は Baga への立のきを強制された。加害者の一部は警察の手で殺され、他は Tu'umbou の山奥深く逃亡。この間、Tuokasi の集落や Paramata 海岸にあつた Paele

などが焼き払われたという。】



第十三図　LEZUTUNI 家の遷徙図

後述するように、当時はすでに、植民地政府やキリスト教諸会派の接触がすゝみ、原住民相互の武力抗争も衰微しつつあつたから、上述の遷徙の一様態をもつて、西欧文化接触以前の Solomon "山地民" の実態として一般論化することは早計かもしれない。しかし、タロ芋・ヤム芋の焼畑農耕に、生活の基盤をおいてきた原住民の居住空間は、必ずしも固定的であつたとは考え難い。Simbo 島では、部落は数戸からなり散在するいくつかの hamlet から構成されており、部落民は別に畑作中に寝泊りする出作り小屋をもち、これら臨時の小屋が、やがて、新しい hamlet に発達するという報告が、今世紀初葉、Hocart, A. M. によつてなされている。(The Cult of Dead in Eddystone of the Solomons.), なお、同島北西岸のわずかな傾斜面上にある Menga は、戸数四からなる小集落で、Masuru 部落から分れ、かつその成立は最近のことという。

（九）焼畑農耕民の移住について

サツマイモが導入され、これへの依存度は近年増加しつつあるが、原住民の食糧の基盤は、タロ芋、ヤム芋にあることはすでにのべた。この地域の一年が、四月から十一月までの東南貿易風季と、十一月から四月までの西北モンスーン季の乾・雨二季に分たれるといつても、緯度が低いため、年間を通じて気温に大きい変化がなく、降雨がほゞ平均的な分布を示す。このような自然環境のもとでは、上記の主要栽培植物、就中、タロ芋*耕作は季節的変化を被ることが比較的すくない。

【*タロ芋は一年を通じて栽培が可能といわれる。タロ芋耕作をめぐる農耕儀礼はヤム芋のそれにくらべて発達していないのは、この非季節性に対応する。なお、芋作の儀礼については、別稿で論述したい。】

農耕作業は、男性による伐木・焼除・穴掘り、女性による苗芋の手当・運搬・植付け・収穫という性別分業によっている（第十四・十五図参照）。除草は行うことがあっても、施肥は従来行われず、

第十四図　掘り棒による農耕作業
(Simbo 島にて)

鉄製利器の導入後においても、小喬木以外は枝を払っただけで、根幹はとり残されることが多く、穴掘りも掘り棒によって、小さい浅い穴が掘られる程度である。この粗放な焼畑農耕は、土壌の肥沃度の低下をきたし、やがて畑地の休閑を必要とする。畑地を放置しておくと、やがて二次林・雑草が生長・繁茂し、再びこれらを伐り倒し、焼き払って、植付けをくりかえすが、地味の逓減はさけられない。このため、長期におよぶ休閑期をおいても、収穫は漸減する。この間、新たに適地を他に求め、新規の開墾をこゝろみる。

このようにして、栽培地の移動に伴って、彼らの住居地点もまた転移することが考えられる。Lezutuni Silas の家族らの Terolamana より Maisao への遷徙の事由は、おそらくこのような一例といえるのであろう。この際、移居は当然大きい集団では行われ得ない。数戸の血縁者からなる小集団が、新たに hamlet を営んだと推定される。Simbo 島に関する上掲の Hocart, A. M. の報告や Mengaの成立も、このような小集団による移居を物語っている。後文にあげる伝承第5 KUKUPORO の前半もまた、Simbo 島の Sisoro 部落の人々が、よりよい生活・住みよい土地を求めて移動することを物語っているが、これも全部落をあげて行うのではないことを示唆している。Vella Lavella 島 Leona 部落の Noqovoki Samu 老人の語る Kumboro での山間生活の体験もまた、このような血縁数家族による移居を示唆している。

しかし、近森論文も述べているとおり、彼らの生活空間が無制限に拡がっていたかどうかは検討の余地がある。さきにあげた伝承第2にみられる Oula 河畔の Rurusare-Wagina の成立の口碑も、この点を示唆する。しかし、また、Sarapaito 族および Kanepore 族の了解を得て、新来の Wagina 族が Oula 河の南岸に住みつき得たという伝承から、逆に何らかの条件の下では、他族の生活領域へ

の進出が不可能ではなかったという解釈もされうるかもしれない。問題は予想される〝生活空間〟が、当該氏族集団の用益権の適用範囲としての意味をもつものかどうか。あるいは、よそ人の侵犯を拒むその仮定される〝生活空間〟は、労働力の注入という具体的な標示を現在的にもつ領域に限定されるものかどうか。実はわれわれは、かつて未開墾の叢林、ないし放棄された旧耕地は、誰人でも一族の、就中、酋長・長老らの了解を得て、（特別な代償の支払いなしに）耕作することが普通であった、ということを聴取したが、土地所有権の観念は、もちろん発達せず、用益権も長期・固定的ではなかったのではないかという疑念がもたれた。むしろ、開墾・植付けに当ってとり行われる儀礼――その結果、そこに働く taboo 観念が、その土地の占有権と関連して考察される必要のあることを感じる。また、Silas の記憶では、Barakio での出作り小屋生活は、上述のように Tetelana の丘にあった〝大きな nut の樹の実〟の採集が主目的であった。しかし、Terolamana 居住時代以降には、nut 採集のため、その Tetelana の〝大きな nut の樹〟へは赴いた記憶がないという。一時的な居住であったと推定される Jouluasi 時代の記憶もまた明白でないが、これも焼畑耕作と関係する可能性は薄く、おそらくは、Barakio 同様に、nut などの採集がこゝに仮屋を営ませた理由ではなかったか。こういう彼の回想を通じて、われわれは、目下、山間生活期における〝占有権〟なるものの実態を推想することができるにすぎない。しかし、これらの事例は、強力な外来文化との接触後という事情、すなわち、その結果として、古い社会組織・慣習の弛緩しつつあった状況下であり、Veala 族の生計領域と考えられる限られた空間内の聴取例にすぎないのである。いわゆる氏族集団のなわばり的空間の実態の解明は、西部 Solomon に限ってみても、もっと広範囲にわたる資料の蒐集に待つ面があろうし、さらに、Melanesia その他の地域における焼畑農耕民のそれらとの比較研究によって明らかにされてゆくものである。要は焼畑農耕民の焼畑の転移――従って居住空間の遷徙にもつながりうるが――マキシマムな見方をすれば、直線的なそれなのか、それとも、一定の限られた領域内を循環する回帰的なそれなのか。極言すれば、生活空間の固定性という問題に集約されるが、この問題の解明は、更に通婚圏などとの問題にも関連をもってくる。資料の整理を俟ち検討したい。

なお、居住空間の遷徙の動因として、上記の経済的理由以外を、Lezutuni Silas らの体験からきき出すことはできなかった。たとえば、かつては死人が続くと、その土地を忌んで放棄することがあったというが、親族等の死去*と住居の転移の関係を具体的にする資料は得られなかった。

*Silas の妹の Ninibulu は、Beselando で生まれ、10才？前後で、Terolamana で死亡。つぎの妹の Minagola は、出生地不詳。後述する Niatovilu で、同様に幼少時、病死している。弟四人中、Paramata に現住する Zakies（47才？）は Tuokasi 生まれ。他の三人は、ともに比較的短命で、一人は Tuokasi？生まれで同地で死亡。一人は Tetelana で生まれ、同じ地で、そ

して末弟は Jouluasi 生まれで、同じくその地でそれぞれ生後間もなく夭折したというが、後二者の地名はそれぞれの埋葬地点か？】

（十）西欧文明との接触

Maisao 在住当時、Lezutuni は Jorio に宣教の橋頭堡を築きつゝあつた Missionary と接触している。Veala Lavella 島における最初のキリスト教の宣教活動は、一九〇七年の Methodist のそれで、R. C. Nicholson が島の南地区に上陸し、Biloa に布教所を設け、土民教化に当つたのが草創である。Vella Lavella の原住民にして、最初の教徒となつたのが Daniel Bula で、彼の感化をうけた二人の原住民 Missionary の John Mangu と Themoti が、一九二二年頃に、Supato 付近の Serulando にあらわれ、Mission Stationを中心に、同族教化に従事している。Maisao 川口付近の Jorio の海岸に Missionary が出現したのはこのころである。

当時20才前後？の Lezutuni は、同年輩の六人の若者と一人の女性とともに、宣教師に伴われて、当時 Vella Lavella 島における Mission の Head Station のあつた Biloa へ移り、こゝで六カ年に及ぶ薫育をうけたのち、さらに西部 Solomon における Methodist の Head Quarters の所在地 Roviana へ移つて、約四年間の生活を送つた。さらにのち一年ほどこゝに留まり、ヤシの plantation などで働いている。このころ、豪州出身 trader と原住民婦人の間に生まれた "half caste" で Roviana の Head Quarters の nurse であつた Katepose と結婚し、間もなく、Vella Lavella の Niatovilu へ戻つている。この間、彼の父母らは再び Terolamana へ移居、そのご Methodist 派の洗礼をうけ、ついで、海岸の Niatovilu へ転居している。

第十五図　収穫物（タロ芋）を運ぶ女たち
(Ganonga 島 Mondo 部落にて)

Lezutuni が Veala 山腹の Kungu に出生当時、集落はすべて山間に営まれていたという。海岸の bush や河口付近の木蔭に tomako すなわち warcanoe の収納庫でもある Paele があつた。漁獲などの折、下山してこゝに宿泊することはあつたが、常住の場所ではなく、海岸低地には居住がなされなかつた。これは、Leona 部落の Ben や Supato の Varovake

あるいは Choiseul 島 Papara の Bamblu などの古老の一致した体験でもあり、過去の集落の山頂・山間部への集中は、諸伝承とともに、考古学的観察によっても裏付けられ、これが、当時の首狩りの習俗と強く結びついた防衛的性格をもつ集落立地であったことが理解される。

Lezuturi の出生以前の、一八九三年には、英国により東部 Solomon とともに、西部 Solomon の中心である New-Georgia 島などの領土宣言*があり、彼の出生前後の一九〇二年には、Methodist Mission が New-Georgia の Roviana に Mission Station の基礎をきづいておる。このように、二〇世紀初葉より、政教両面からの働きかけが、徐々に西部 Solomon にも及んでいった。しかし、白人 trader のこの海域への進出はそれより早く、一八八〇年代、あるいはさらに同じ世紀の六〇年代に遡る。独・西・英（豪）・仏などの貿易商は、おもに銃器や斧・短刀などの鉄製利器、あるいは布地・帽子・タバコ・パイプなどを船載して、沖に出没し、主としてグリーン・ココナッツ、貝類、ときに土俗品との交換を行ってきた。

【*たゞし、Ysabel 島、Choiseul 島、Bougainville 海峡諸島などの、他の西部 Solomon の英国領有は一九〇〇年】

これら船来の商品に対する原住民の魅力は相当に強く、それを物語るエピソードがすくなくない。たとえば、白人 trader らの飲用したウイスキーの空壜の交換レートは、一九〇〇年前後、ココナッツ一〇〇個であったといわれる。もつとも、それら船載品の入手を渇望しながら、当初は、白人との直接的な接触を躊躇し、Veala 族の誰人も、通商基地であった Baga 島の属島（Inia 島、すなわち今日いう Binskin 島であろう）に容易に近づこうとはしなかったといわれる。因みに、空壜は容器としてより、おもにその破片*を利器として用いた。ひげそり・入墨にも使用したという。

【*上記 Veala 山の集落遺蹟 E 3 section No. 8 の住居址出土のガラス片も、当時、白人より入手したガラス空壜の破片であろう。】

trading boat の積載品中、もつとも原住民の反響をよんだのは、銃器および manza とよばれる鉄斧などの鉄製品であったといわれる。trader としての体験をもつ Mr. Palmer, A. E. が伝聞として語るつぎのエピソードは、南部 Solomon での事件であるが、当時の Solomon 原住民の鉄器に対する関心のつよさを象徴する。

San Cristoval 島の東方にある Sta Catalina 島の big chief が、San Cristoval の中部南海岸の Haununu に、兼ねてきいていたきわめて powerful な黒い石があるとのニュースを耳にした。彼は八〇人乗り?の大型 war canoe をとばして、100 km の海上を Haununu に向つた。Haununu の head man は求めに応じて、Catalina 族に、白人から購入した木桶にはめた鉄たがを示したが、Catalina の酋長は、war-canone に積載してきた貝貨、その他の財貨の交換を条件に 20 cm にもみたない長さの鉄たがの一断片の提供を乞うたといわれる。これが San Catalina 島に鉄がもたらされた最初であったという。Lezutuni Silas の父 Poreke

もまた、それら欧州人のもたらす船載品に大いに魅せられた一人であつた。彼は前後して二丁の小銃を購入している。のち、首狩りの禁令がでて、（一九〇五年？）植民地政府により、これを没収されるまで、この火器は戦争・首狩りの際に、威力を発揮し、彼の社会的栄誉を高めている。

西欧文明とオセアニアの文化との接触は、もちろん、前者の資本主義勢力の能動的な進出によることはいうまでもないことであるが、白人 trader との接触当初、原住民がもつともつよい関心を示したのが、銃器ならびに鉄製品であつたといわれることは、Solomon 諸族が、戦争・首狩りを太い軸にして展開してきた彼らの社会の中に、白人の組み入れを促進する契機をなしている点で興味深い。つまり、初期の船載品のもち込みは、原住民の伝統的な社会・生活様式を本質的に改変することがなく、むしろ、鉄製利器・小銃などの導入によつて、その伝統社会を鋭角的に促進させることにより、（白人渡来初期における人口減少の一要因は戦斗の熾烈化にあつたといわれる）黒・白両者の間に、交流の足場が基礎づけられ、これにつづいて、二次的に展開される植民政府やキリスト教布教団の働きかけ*‖原住民の伝統的な社会組織・精神文化・価値体系の内面的変革へのパイロットとなつている。

【*もつとも、上記過程で、trader らと Missionary との原住民に対する態度・互いの利害得失は、往々にして相反し、両者が反目・対立することが少なくはなく、そうした事例をいくつか聴取した。“Blackbrider” と呼ばれた奴隷狩りは、Vella Lavella にも出没し、すでに植民地化されていた Fiji や Queensland などの planter へ売り渡された。これら白人商人の海賊的行為は、Mission 各派の原住民教化の上に大きい障害となつたことは、この地方の布教の草分けである Nicholson, R. C. の報告にもみえる。】

（十一）白人世界への組み入れ

西欧植民勢力の進出当初、西部 Solomon において、最も強力な政治勢力をもつていた New-Georgia 島の Roviana 地区*に、まず、植民地政府・キリスト教布教諸派の圧力と呼びかけが加えられたといわれるが、西部 Solomon におけるこの首狩りの center の崩壊は、必然的に Black People の地域における政治的・軍事的な緊張をやわらげる結果となつた。そして連鎖反応的に、従来の山頂・山間集落のもつ居住空間的価値を弱めるとともに、氏族集団の結束を弛緩させ、相対的に社会組織・世界観・価値観・諸規範に影響を与えていつたと推測される。そして、さきに述べたように、これがヨーロッパ物質文化に対する魅力・植民地行政・布教団の呼びかけに応じて、Solomon〝山地民〟の山間より海岸低地への遷徙を可能にした文化的・社会的・政治的条件であつた。

【*西部 Solomon、従つて Black Spot の中にしめる New-Georgia 島の位置は重視に価する。Roviana 方言が New-Georgia の主要語とされ、Ysabel の南岸や遠く San Cristoval 島の東方 Santa Ana 島にすら、これを理解し、話すものがいた

といわれるほどの dominant な方言であるが、これが Roviana 地区の軍事的、ないし政治的勢力と無関係ではない。しかし、同じ New-Georgia 島南部の Marovo 方言が、かつて Roviana 語より、dominant であつたと考えられ、各地にある Marovo の settelment が、Roviana 族の興起によつて、侵略・縮少されたと推定されており、(Ray, S. H.; A Comparative Study of the Melanesian Island Languages.) Black People の世界にも、〝ヒストリー〟のあることがしられる。いずれにしろ、Roviana族のこのような政治勢力の実態を明白にすることはできないが、たゞ Roviana 地区を瞥見した印象では、New-Georgia は地積が広く、群島の中心をなし、多島をそのうちに擁し、狭い水道によつて外海に通じる世界最大といわれる (Pacific Islands Year Book.) Roviana Lagoon を前面に、長い広がりの山地斜面を後背にもつ、その地理的環境が、政治的優位を生みだした一素因であつたのではなかと考えられる。Marovo 地区もまた、Roviana と相似た地理的条件を備えていることが理解される。

なお、Roviana 勢力の崩壊後、こゝに植民地政府の一拠点が建設され、Methodist 教会もまた、この地に Head Quater を設置した。(別稿「英領ソロモン諸島調査概報」参照) 後者はとくに、Roviana のもつ旧勢力を利用し、その方言をもつて、西部 Solomon 地区での布教事業を推しひろげた。Roviana 語が original boundary を越えて、西部 Solomon の lingua franca 的存在となつたのは、このような経緯も配慮されなければならない。(A Roviana and English Dictionary の序文参照)】

さきにのべた Lezutuni 家の居住地点の遷徙を、白人世界との接触という観点に立脚すると、その移動の軌跡が、山間より海岸部へ指向しながら、直線を描いて、一気に海岸低地に降つていなかつたのは、外来の白人文化に対する原住民の respons の指標であつた。Choiseul 島 Papara 部落の Bamblu (80才ゟ) は、最近までこの海岸低地に成立した Methodist 部落社会への合流をためらい、山間から降りながら、長らく後背地の叢林中にひとり住んでいた。彼はいまだに heathen である。また、Vella Lavella 島の Supato でも、山間の Goluduni 部落から現部落への遷徙は一時的に行われたのではなく、この付近唯一の heathen の Varavake 老人は、今なお、Methodist の部落から離れて暮している。

原住民の山間集落の放棄、ないしこれからの離脱にみる時期的遅速の差は、山間生活における伝統的な習俗・信仰の放棄のそれと相関の関係にあつたと考えられる。この意味で、Roviana 地区の白人世界への組み入れ後も、その周辺では、比較的大規模な集落が、のちまで山間に存続し、中にはそのまゝ絶滅したものもあるといわれ、あるいはまた、特殊な職能をもつ Rakomo (呪術師) が、最後まで山間にとどまり、その叢林中で斃死したという報告も注目される。Choiseul 島北端の海岸部落 Sirovana でも、いまだにその後背地の Zalebesi のジャングル中に住む者があり、それが Rokovavene という名の老呪術師である。*

【*これらの事例は、もちろんすべての witch craft のたぐい

が、いちように最後まで山間にとどまつていたことを意味するものではない。また、伝統的な信仰・規範の一切が、海岸集落生活で根絶してしまつたのでないことも既にのべた通りである。

Methodist Mission から分れて創められた C. F. C. は、primitive religion 的要素の濃い新宗派で、New-Georgia の北部海岸に建設された "Paradise" を中心に、原住民間に多くの帰信者を生みつゝあること、そして、その教祖 Eto Silas が、かつてこの地方のもつとも powerful な呪術師であつたこと（別稿「英領ソロモン諸島調査概報」参照）は、この間の事情を示唆する。】

なお、Kumboro 族の一酋長を父にもつた Dive Ben（Vella Lavell 島、Leona 在住）の体験によれば、彼の幼少時代の一九二四年前後に、はじめて海岸部へ遷移して、Methodist Mission の宣教下に入つているが、Ben の家族は同族集団の中では、もう一つの家族とともに、最後まで Blunblu の山間叢林にとどまつていたグループであり、父の Londo は、ついに海岸に移らず、山間で死亡している。

（十二）海岸低地への移居の人口動態的意味

原住民の山間より海岸部への遷徙が、必ずしもスムーズに行われたとは考えられないが、さらに現住の海岸部落の生活が、島民によつてこれまた必ずしも好ましいものではないということも、しばしば各地で聴取した。山間・海岸の両部落生活の体験者は、ほとんど一様に、前者のそれを是とする。こうした見解は多分に感情論的なものがあるが、多種多様な事由が、彼らによつて列挙された。長期に及ぶ植民地支配から生じる反感・不満・貨幣経済にまき込まれる過程で生じる一連の経済生活上のトラブル・急激な価値観の転換に対応しきれぬ不安などなどが、過去の山間生活に対する憧憬となつてあらわれているが、彼らが異口同音に、海岸には病気が多いが、過去の山間部落では疾病はほとんど稀であつたことを強調する。*

【*Ganonga 島、Vella Lavella 島西海岸などでの聞き書きでは、下痢と咳以外の病気を知らなかつたとすらいう。】

白人との接触によつて、インフルエンザ・痲疹・赤痢・猖紅熱・肺結核・天然痘・淋病・百日咳・ジフテリアなど種々の悪疫が、原住民社会にもたらされた。*風土病の処置について適切な知識をもつが、新来のこれら疫病に対して抵抗力のすくない原住民のあいだに、想像し得ないほどの多数の死亡者を出したという。喘息や流行性感冒すら、彼らを容易に病死に追いやつている。

【*この地方の代表的風土病であるマラリアも、白人が Fiji 方面からもち込んだ悪疾であると、訴えるのをしばしば聞いた。】

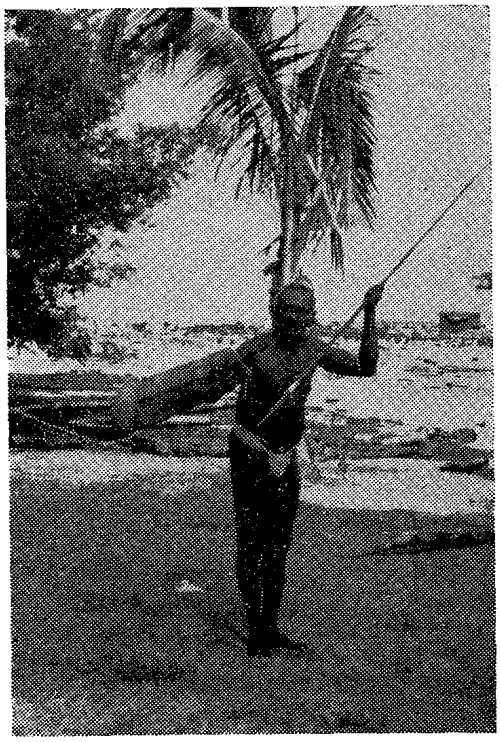
Harrisson, T. H. によれば、New-Hebrides において、一五〇年以前、推定百万を算えた原住民人口が、白人との接触後、その十五分の一以下の六万人に激減したといわれるが、程度の差はあつても、西部 Solomon においても同じような現象がみられ、恐ろしい速さで、原住民たちが死滅し、廃村が続出したという。Choiseul 島に関しても同じような報告が Bernatzik によつてなされてい

る。（Bernatzik, H. A. 小池新二訳「メラネシア探検」）

このような原住民死亡率の急上昇の原因としては、Rivers のいうように、旧慣の喪失による無気力化のほか、上述したような奴隷狩り・苦力徴募などによる成人男子の離村・一夫多妻制の衰退消滅・銃器などの導入による部落間の戦斗激化など、種々の原因も考えられる（この問題に関しては、Rivers, W. H. R.; Depopulation of Melanesia. 一九二二、その他を参照）われわれの採取し得たデータによる限り、西部 Solomon では、原住民にとつて未知の疾病によるというのが、死滅原因の最たるものである。

【一八六〇年代から七〇年代ころが、原住民人口の最激減期という。】

この白人接触以後にみられた原住民人口の激減は、海岸部に遷移したものと、そのまゝ山間部にとどま者るとを問わず、一様にみられた現象であるが、植民政府・伝道団の医療施策の及んだ前者よりも、のちまで叢林生活を固執した後者において著しかつたといわれる。Vella Lavella 島の西海岸では、Kumboro 山から降下して、Niatovilu（Leona 部落の北方約5km）付近の海岸低地に新しい集落を経営んだ一集団が、間もなく相ついで未経験の疾病におかされ、その大部分が死滅した。そのため残余の者たちが、再び叢林中にもどり住んだという例もあつたが、そのまゝ山間にとどまつて、部落全滅の結末を招いた伝承を多く耳にした。Supato 北隣に孤居する Varovake 翁によれば、山中の Goluduni の部落に二〇人の戦士とその家族がいたが、その多くが死亡し、彼も妻子らを失うに至り、ついに Goluduni は廃村に帰したという。



第十六図　老　戦　士
（Vella Lavella 島Leona 部落にて）

このような人口の減少が、逆説的に、原住民の海岸低地への遷徙定着を容易にしているのは、注目される点であろう。すなわち、白人接触につづく原住民の罹病・死亡の激増現象は、伝統的な氏族社会組織の衰退を促進させたと考えられるのであり、また海岸低地という焼畑栽培民にとつて限られた生計空間（この点に関し後述）への移行が、比較的短い期間に行われ得たのは、その急激に減少した人口にして、なし得たと思われるからである。いわば、外来物質文化に対する欲求という彼ら自身の心理的指向と、外部からする働きかけとに対応して行われた居住地点の移動というこの文化変容を可能にした一側面は、短時日におけるその人口減少という社会的現象に関連していたといえるのでなかろうか。

過去の山間集落と現在の海岸部落は、その占める空間的位置をいちじるしく異にしながら、同じく焼畑農耕を主軸とし、従的に漁撈・狩猟などを行つており、それぞれの生活のよつて立つ経済的基盤に本質的な相異のないことは、近森論文のくわしく報告するところである。しかも、主要食糧の供給源たる芋作の適地は、海岸低地には求め難く（第十七図参照）、過去の山間生活時代と同様に、これらを山地斜面に仰いでいる。南緯7～9度のSolomon西部においては、原住民の経験によれば、標高500m前後の山間が*、yam・taro・pana などの栽培の最適地であるという。

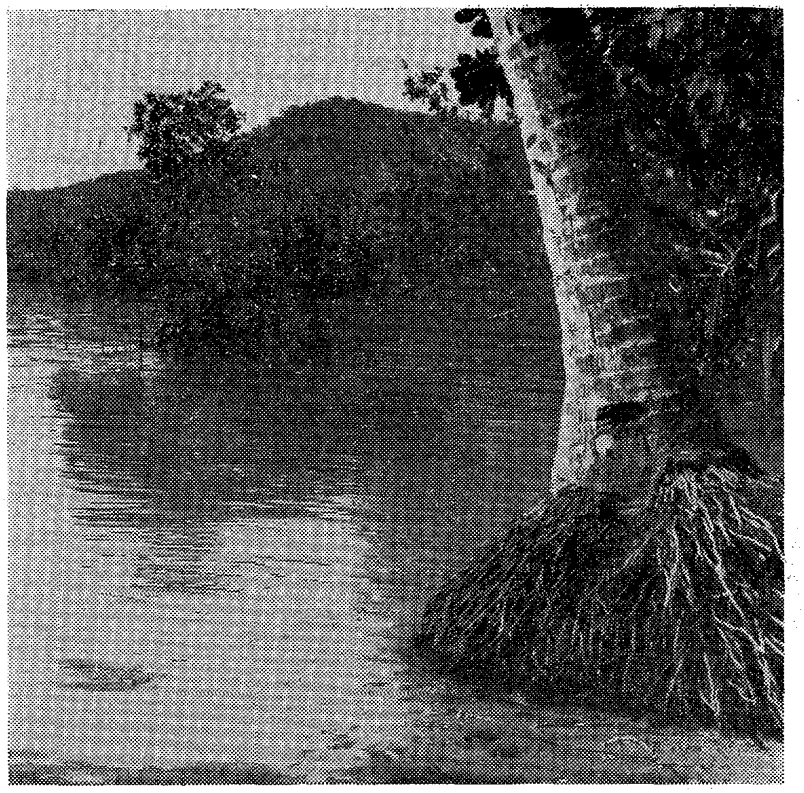
【*Kolombangara 島（最高峯1,661mのすり鉢型の火山島）の西北山腹にある351mのShoulder Hillを中心に、一大集落群址があるといわれる。旧集落群址をもつ vella Lavella の Veala・Kumboro・Tu'umbuo の各山もまた、それぞれ約300m、約350m、約750mの標高である。】

従つて、海岸集落における農耕活動の空間領域は、山地生活におけるそれに比して、いちじるしく制約を被むらざるを得ない。山間生活にあつては、住居地点を中心に三六〇度のひろがりにおいて可耕の空間が存在する。これに対し、海岸部にあつては、住居地の前面に展ける海辺を除く一六〇度のひろがり、しかもそのうち、海岸線に沿う低地は多くコーラル原であり、マングローブ林などの密生する芋作不適の空間帯であつて、さらに制約があり、可耕地は後背山地に向つてわずかに扇状に存在するにすぎない。

このような海岸低地のもつ生計的空間としての劣勢は、経済基盤の質的変化なしに、山間生活当時の比較的巨多な人口を収容し得る可能性が少なかつた、とみなければならない。また、過去の山間集落が規模が大きく、その人口もきわめて多かつた、という原住民の説明も、理論的にも許容しうるものがある。海岸低地への遷徙を可能とした passive な条件として、この人口動態的考察も加味されなければならないと前述した所以である。

（十三）LEZUTUNI の PARAMATA 移住前後

〝われわれの土地で豊富（プランテー）なものは、たゞ子供とヤシの実だけ〟―島民が、現在の Solomon について語るとき、このような表現をするのを各地で耳にした。この原住民自身による Solomon 評は、巧まざる一種のアイロニーでも自嘲でもあるが、この中に、現在の海岸集落形成後に生起した経済生活上の諸問題が包蔵されている。すなわち、上にのべたように、海岸低地への住居立地の遷移に伴う可耕地入手の困難性は、経済活動の行動半径を延長させ、必然的に労働過重となつてあらわれ、さらにこれが出稼ぎとともにココヤシの栽培などによる貨幣経済社会＝植民地体制下へのくり入れを促進する一要因*となつている。そして新たに生起しつつある分村化の傾向もまた、この経済生活の破綻に対する内的適応の仕方と見ることができよう。そして、現在の Solomon に多い（海岸低地への遷徙当初に比較して）といわれる子供＝人口増加は、分村化の現象と関連性をもつ。



第十七図　海岸の景観
（Vella Lavella 島にて）

*【もちろん、このほかに植民地政府に対する納税義務――地区により税額上に相異があるが、年間三～五ポンド前後の戸税――や、舶載商品に対する購買意欲などを軽視するわけではない。】

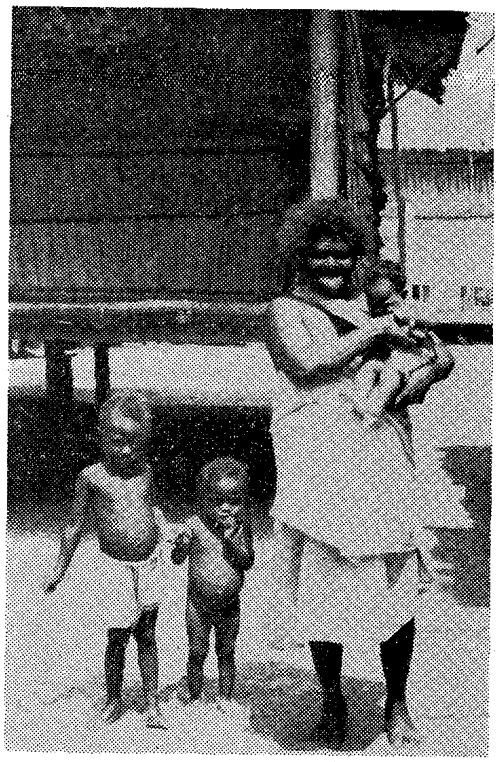
長期にわたるたしかな人口動態を把握しうるような census をわれわれはもたないが、*(1)最近二〇～一〇年間の Solomon における人口増加は、政府・W. H. O.・布教団の医療予防対策に負うところが多く、*(2)とくに、出産児の死亡率の低下は、近年のいちじるしい傾向といわれている。

【*(1)一九五九年に、Australian National University の Dr. Norma McArthur の指導下に、はじめてほゞ正確な cencus が得られたにすぎない。なお、一九五八年現在での Melanesian 系住民の推定人口は、十万八千二百人であったのに対し、この一九五九年の cencus では、十一万七千六百二十人を算えている。】

【*(2)たゞし、とくに Simbo 島で、10才台の青少年男女の間に、小児麻痺患者が多いことが止目された。西部 Solomon 中、最も早く治安が保たれ、衛生思想の進んだ地方の一つといわれる同島を中心に、十数年前、小児麻痺病が流行し、少なからざる犠牲者を出したという報告を得た】

筆者が Paramata 部落において、Methodist Mission School の若い教師 Eapi 君（Vell Lavella 東海岸 Jawa 出身）の協力を得て行った人口統計*では、同部落の一戸当りの子供の数は平均五・四人強、隣村 Leona では四・〇人強であった。

*【壮青年層の出稼ぎによる出入があり、正確な census はいずれの部落でも困難である。キリスト教の教化により一夫一婦制がノーマルな形となり、家族構造が単純化しているので、その調査は比較的容易であるが、構成家族の正確な年令は幼少年にあつても把握し難い場合がある。おゝむね mission school の就学児童である 14～5 才以下の年令層は、総人口の約 70％に達する。子供の性別は男一に対し Paramata（男児五三人、女児四五人）



第十八図　母と幼い児たち
(Vella Lavella 島 Leona 部落にて)

で女〇・八五弱、同じくLeona（男四七人、女二九人）で女〇・六一強を示しており、女児数の寡少が目立つ。Nicholson によれば、Missionary の接触当時、嬰児殺し、とくに女児のそれが目立つたという。畑作労働に堪え得ぬと判断された虚弱女児が、その主たる対象とされたという習俗が、果して近年まで秘匿されて生きていたのか。あるいは、この男女数のアンバランスは、統計上の絶対数の僅少上からきた結果であるのかは明らかになし得なかつた。】

Paramata 海岸部には、Veala 系諸族の Paele が在り、山間集落時代における漁撈・遠征などの海上活動のための、step としての位置を占めていたが、例の Binskin 事件後、人々は Veala 山麓に還住し、一部はこの Paramata 付近に散住するものがあつたという。Lezutuni Silas らが、この Paramata へ定着したのはおゝよそ三〇年前に遡る。彼が Roviana から帰島し、当時、Maisao の叢林中からでた父 Poreke らのつくつた Niatovilu の集落に入つた。このころ、Kumboro, Songga, Sukuo, Veala などの山間集落から散発的に下山遷徙し、海岸低地、ないしその後背叢林中に小集落をなすものが少なくなく、Wataro の海岸の Jorio, Kirakira, Niatovilu もそうした新規の hamlet の一つであつた。

すでに母 Bongarige は Niatovilu で死亡。* Silas の帰島後、間もなく、父の Poreke も病死。キリスト教風の葬儀を彼の手で執行したあと、同族・近親らの要請によつて、head man であつた Poreke の死体を、洋上の Omauva 島へ運び、氏族の伝統に従つて、こゝで第一次葬を行つた。（土俗的葬法は複葬。この問題については後述）

【*Poreke の死に先立つ数年前のことで、Niatovilu 東方の Poronga に、キリスト教式により埋葬。なお、Ruruke（Silas の父の異父弟）も、このころ、Poronga でキリスト教風に葬られている。】

Niatovilu から Paramata への移住は、Lezutuni Silas の家族（弟の Zakies を含む）、叔父の Neoh の家族など七家族二七名によつて行われた。うち、四家族が Veala 系 Rurusare 族で、残りの三家族のうち、一つは Simbo 出身の Sogavaka の家族、他の二家族も Rurusare 族ではない。* このころ、古い社会組織の崩壊の傾向が顕著である。

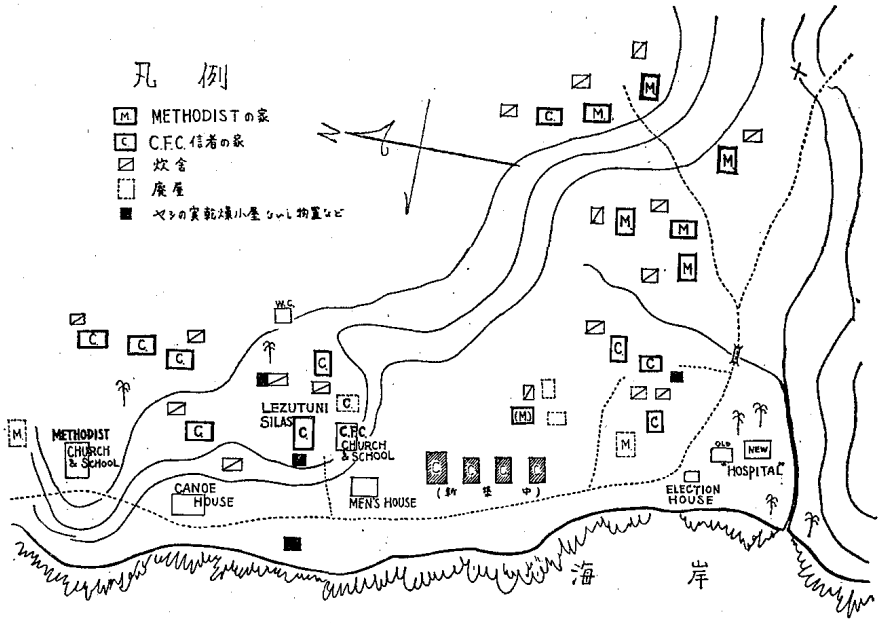
【たゞし*、そのうち、Sivele（Paramata 現住の Olava の父）は Lezutuni と母方で、他の一家族（同じく Paramata 現住の Henry らの父の家族）は、Lezutuni と父方で血縁関係にあつたという。】

Niatovilu→Paramata への移転の目的ないし動因は、単純明白ではない。Lezutuni Silas や Neoh は、〝生活によりよい土地を求めて〟と説明している。おそらく、彼らの過去の生活領域の中心に近かつたことが、ここを新居住地として選定させた大きい動機ではなかつたかと推測される。すなわち、彼らが、かつて居住した Beselando や Barakio に、この Paramata が接していたこと、Veala 族系の Sope（skull house）が存する Lunga の地が、Nanga の入江を挾んで、その南に接していたことと無関係ではなかつたかもしれない。しかし、この遷徙を発議し、この動きの中心であつた Lezutuni Silas は当時、Methodist 教徒としての自覚の最もつよかつた時期で、また、Sope のもつ伝統的機能も、このころ消滅に向いつゝあつたと考えられるから、新住地 Paramata とこの祖霊の地 Sope の関連を強調しすぎることは適切ではないだろう。地理的にも Paramata は Niatovilu と Lunga のほゞ中間に位し、必ずしも接壤していない。なお、おそらくこの前後と推定される時期に、Ganonga 島において、中部 Ganonga の Mondo から、島の北端 Vori へ行なつた移住の場合をみても、Sope の所在する祖父の地を去つて、海路、比較的大規模な分村をしている。今日、Vori でみる Mondo 族の墳墓はすべて、キリスト教式に則とつたもので、いわゆる "old custum" 的な skull house は、Mondo の後背地のみにみることができる。（拙稿「英領ソロモン諸島調査概報」参照）

Paramata 移住と Sope そのものとのつよい mental な結びつきは容認し得ないとしても、Lunga が Veala 系の Rurusare 族の Sope の所在地*であつたという事実は、この移住に関して無関係ではない。

【Lunga にある Sope の地が taboo とされたとしても、それが限られた Sope の境内を越えて、Lunga 全域に及んだわけではない。】

Lunga を含む Kilebembala 岬は海上に細長くのび、珊瑚礁に囲まれたほゞ平坦の地で、Silas らは、Paramata への移住後、この岬にココ椰子の栽培を行なつているのである。いわば、本来、Sope の在所という他氏族にとつて taboo とされてきた地を中心とした地域が、資本主義社会との接触を契機にして、ココナッツ商品の恰好な生産手段として価値の転化を可能にしたのである。その意味で Lunga は Paramata への移居と無関係ではない。なお、われわれは原住民部落内やその隣接地などで、ヤシの樹幹に、"TAMBU" の文字の刻まれている例をいくつか止目した。本来、あるべき呪的な忌禁の "taboo" なる言葉が、今日では、しばしば経済的な用益・占有権、ないし道徳的禁制の意味で用いられることを付記しておく。土地私有の観念は必ずしも発達していない。しかし、ヤシ林の経営は原住民のあいだに、この観念を助長させ、またヤシの plantation



第十九図　Paramata 部落略図

の経営は、居住空間の固定化を進め、同時に、今後、焼畑耕作地の所有意識をも一段と促進させる可能性を内蔵しているように思われた。

Silas らのヤシ林の経営は、比較的成功をみたもののようで、これと前後して Paramata 海岸部でのヤシ栽培も進められた。彼の Methodist の宣教活躍と相俟って、Paramata は Methodist の部落として発達し、人口も増加した。太平洋戦争時代、一時、Veala 山中に避難したが、部落北部台地上の Methodist の教会、同じく南部 Tetelana 丘の麓の病舎を含み、三十数戸の大きい集落に発達した。その中には、Veala 系以外の他地域の島民や Choiseul など他島出身者も、すくなからず合流している。

（十四）NEW-PARAMATA の成立と分村現象

Leona はこの Paramata 部落から分れて新しく発達した集落で、New-Paramata とも称呼される所以である。この分村活動は、一九六〇年九月、Dive Ben および Supiala Silas の二家族の移転にはじまり、われわれの調査の行われた一九六四年の五月に、Soso Simon 家族の転居が、最近のそれであつた。この間三年八カ月の間に、Leona（旧名 Salurusanju）に西部 Solomon としては、ほゞ標準型の二一戸*の集落が成立した。

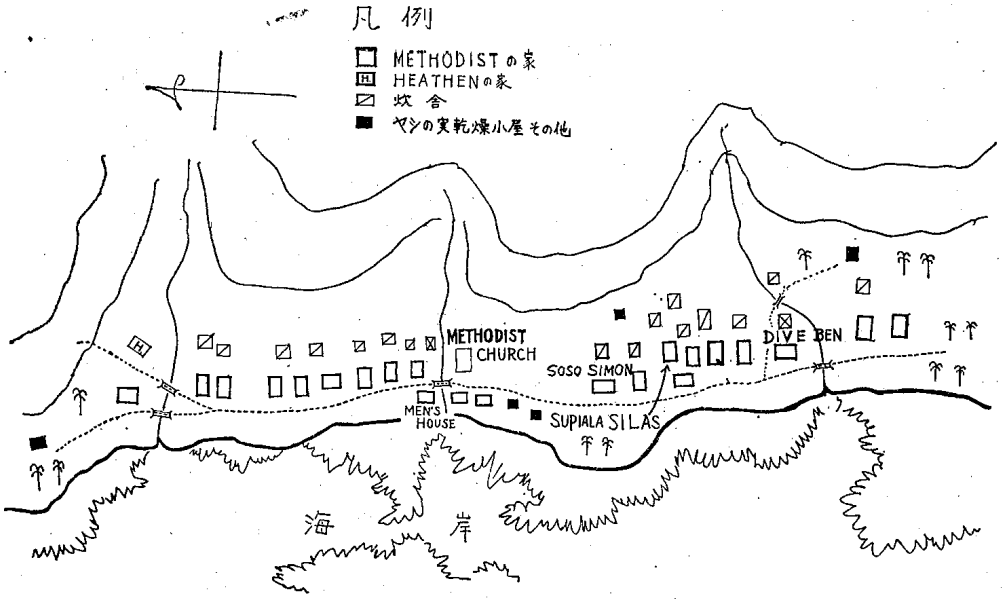
【二一戸全戸が Parmamata から直接分れて移つたという確証はない。なお、このほか、別に青年宿一戸。幼年期、この島の白人経営の plantation に雇用された親と同行・来住し、そのまゝ、Leona 北方にとどまつた Malaita 出身の独身中年者（40才？）の住居が一戸ある。*】

Leona 分村の直接の要因は、Methodist 部落中における新宗派 C. F. C. 信者の発生である。この C. F. C. の概要は、別稿『英領ソロモン諸島調査概報』の中で報告したとおりであるが、南太平洋における原住民の新しい movement の一つとして、最も興味をひくものであり、詳しい報告が必要とされよう。ところで、Paramata における最初の C. F. C. への転宗者は、この Methodist 部落の

草分けの中心である Lezutuni Silas 自身である。彼が C. F. C. の教祖である Eto Silas と同名であるのは、偶合にすぎないが、一九六〇年の前半に、Methodist から転じて、Black People の地上の楽園の出現を説く、Eto Silas の主張に共鳴し、自己の住家に接して、C. F. C. の meeting house を建てた。この間、次女 Gladys、ついで Methodist Mission Head Quater で nurse の経歴をもつ混血妻の Katepose が、この C. F. C. に転じたのをはじめとして、一〇戸がこの新宗教に改宗した。その内訳は、Silas の子女の家族、Neoh、および Sogavaka の息子の Isimeli らで、その大部分は Paramata への移居の同調者、ないしその一族である。（たゞし Olava は今なお Methodist にとどまつている。）この動きに対し、Methodist 活動の中心の一人であつた Ben らは、Lezutuni Silas の指導する Paramata から離脱し、新村の建設を企だて、Leona へ移り、逐次同調者がこれに従つた。今日、Paramata 部落内の各地に、廃屋、ないしそのあとをみることができる。Paramata 中には、なお、六戸の Methodist 教徒がおり、*Paramata 海岸から東に奥まつた丘陵上、およびその麓にブロックをなしている。（第十九図参照）

【*別に Aisake（70才〜以上）が一戸を構える。彼も Methodist であるというが、ほとんど heathen に近い】

この C. F. C. と Methodist の信仰問題による分村化にみるような社会組織の再編成は、西部 Solomon における新しい動向である。Simbo 島の属島 Simbo nusa 東海岸の Riro 部落は、最近 New Zion と命名した戸数約一〇戸、人口五〇前後の小部落であるが、Elijar Hoala という中年者を中心に、全村が C. F. C. の信者から成つている。Simbo 島にはこの C. F. C. ほか Methodist と Seventh Day Mission* の三派が行われ、信仰はそれぞれ部落単位でなされている。この傾向は西部 Solomon を通じてみられる現象である。Paramata に Methodist と C. F. C. の両派が共住しているのは、一つの過渡的現象とみることができるかもしれない。Solomon の宗教市場はおゝむね部落単位で開発され、たまたま異宗派分子が生じると、自から分村し、あるいは疎外されて同一宗派の部落に合流する傾向を示す。かつて、氏族が氏族集団としてのまとまりをもちつづけた traditional な信仰・規範のもつ社会的機能の一側面を、新しく再編された社会において、キリスト教が果している。酋長・長老に代つて、土着のキリスト教 leader が、Paele あるいは Sope に代つて教会が、それぞれ部落における社会生活の展開の中軸となつている。西欧文明との接触によつて、古い氏族社会が崩壊しながらも、なお、そこでは、個人は社会集団の中に沈澱しており、集団の中でのみ存在しうるという氏族社会時代の延長が遺存する。われわれは、しばしば、原住民が互いに牽制しあいながら、旧来の伝統文化の多くの側面につよい禁忌の意識を働きかけ、従来の taboo に対して行なう意識的な否定が、むしろ集団統制上に passive な機能を果しておるのを止目した。この意味でキリスト教的価値観は、二重の働きにおいて、今日の Solomon の社会集団を規制している。社会組織・価値観の変化にかゝわらず、



第二十図　New-Paramata 部落略図

今なお、そこに断絶しない社会の連続を見出す。そして、かくあらしめている機能の側面を、その新しい価値観導入の場である教会自体が担っているのは注目される点である。

【一九一四年、Gizo 島において Solomon 布教の基礎が開かれた*】

Paramata から Leona への分村化運動は、Methodist 対 C.F.C の対立が表面にあらわれた動機であるといっても、これを促がした社会的・経済的背景を見落してはならないだろう。委細はここでは略するが Leona 分村前の Paramata 部落の構成員は、Lezutuni Silas の出自である Veala 族系、ないし彼の血縁者のほかに、相当数の他氏族系出身者とその子孫を含む。そのうち、とくに Kumboro 系諸族などの Jorio からの合流者が多く、さらに Iringgila・Supato・Biloa・Java などの Vella Lavella 島の各地のほか、Simbo 島・Choiseul 島・New-Georgia 島などの西部 Solomon や遠く Malaita 出身者も含む。このような、他地域からの合流者と自然増による人口増加に伴って、Paramata 周辺における焼畑可耕地の入手困難が顕現化した。数日おきに、主要食糧である芋類の収穫労働をくりかえす農耕生活においては、焼畑の立地は、集落地点より、おゝむね半径約 2,000～2,500 m を限界とする。しかも、海岸低地を集落地とした場合の可耕地は、山間生活のそれに比し、大きい制約のあることは上述で強調したとおりである。このような条件下の Paramata 部落では、増大する人口増に対応するため、自然、分村化現象の素地を醸成していたと考えられる。しかし、資本主義社会との接触・交流を経験した今日においては、焼畑可耕地を求めて集落立地を、海岸低地をはなれてかつての山間部に求めた例をわれわれはしらない。それは孤立と生活の不便を意味するからであろう。今日、分村は海岸線に対し垂直的にではなく、水平的に行われる。われわれは、Leona への分村者が Methodist で、しかもその多くが、Paramata-Leona 間（約 2km）の海岸低地にヤシ林を栽培し、かつ、その後背地に焼畑を営むものであること、また、かつて、Leona の北方の Maisao 流域に焼畑

耕作を行つた Jorio 在住者たちであつたことをしる。そして、彼ら Leona 居住者の焼畑は、再び、Maisao 川の氾濫段丘やその後背地にひろがりつゝあるという。

これに対し、Paramata にとどまる Methodist たちは、ほゞその焼畑を Paramata の後背地――Veala 山麓に現有するものである。[*(1)] 彼らは、礼拝日の朝夕、この C. F. C. の主唱者であり、またかつての Methodist の leader である Silas の家の前を通り、部落の北端にある Methodist の教会に参集をくりかえしているが、[*(2)] おそらく近い将来に、C. F. C. に転じるか、さもなければ、Leona へ移居する可能性なしとしない。なお、両宗派間の感情的対立、ことに C. F. C. に対する Methodist 教徒らの侮蔑視が目立つた。

【Leona へ転移したものでも、いまだ Paramata 後背地の畑地に芋収穫に通つている者を若干目撃した。[*(1)]】

【こゝは Paramata および Leona の Methodist 教徒の子弟の school でもあり、児童らは両部落から通学している。しかし、Leona には別に新しく Leona 在住民のための教会がつくられた。[*(2)]】

Silas は目下、Paramata のほゞ中央部にあたる Leona 移居者の廃屋あとに、図示（第十九図参照）のような plan でほゞ同じ大きさの四戸の家屋を新築中である。この整然とした計画的な建築は、実は C. F. C. の本部である New-Georgia の Paradise のそれにならつたものであろう。[*] その一つに、C. F. C. の school 教師（目下は Lezutuni Silas が自分で代行している）を迎え入れる予定で、他も、Neboti, Huza, Herry ら Paramata における C. F. C. への転宗者を入居させる予定という。

【Paradise は、上述のように教祖 Eto Silas によつて計画建設された新部落で、海岸台地に、同規格の四〇戸の信者の高床式家屋が、縦横に整然と配列され、その周囲に柵をめぐらし、内外に通行門を配しており、柵外に四〇の平地式炊舎を並べている。[*]】

これらの建築の資金は、主として Kilebembala 岬のヤシ林からの収入をもつて充当しており、これが従来彼を中心とする Paramata での Methodist 宣教活動の資金とされてきたものである。われわれは Kilebembala 岬の広範なヤシ林の占有権の実態については明白にできなかつた。Lezutuni Silas は自己の占有権を主張し、他の人々、とくに Leona 転住者たちのある者は、かつてそうでなかつた、と反論していたからである。たゞし、こゝで一応注意されることはつぎの点である。Silas の出自の Sope のある Lunga を含む Kilebembala 岬一帯のヤシ林が、はじめ Paramata に遷居してきた人々の手によつて経営されてきたものであつたこと、Lezutuni Silas 家の占有権は、最初から必ずしも明白とは考えられない点のあること、そして Silas の占有意識、ないし主張は、こゝが彼の一族の Sope の所在地であつたということにもよつている点である。

なお、Simbo 島等で、ヤシ林経営を部落共同で行なつて好成績を挙げている示唆的な事実を付記しておきたい。　（つづく）